連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第②回

青木 裕子 氏（朗読家／軽井沢朗読館館長／元NHKアナウンサー）

――朗読は、母語を極める

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp 代表理事　佐藤 建吉

▼朗読家・青木裕子

次の文章を読んでほしい。

「…芸ってやつはな、所詮一人々々の魂の中に別々に活きてかゞやくものなんだ。お前はお前でなけりゃいけねえ。忘れても俺の芸の皮なんぞ真似しなさんな。そうして取るなら俺の…俺の肉の方を根こそぎ取って、分ったか。なあ、万之助さん分ったなあ」

正岡 容（よしおかいるる）作『置土産』の中から抽出した。正岡容は、あまり聞いたことがない。また『置土産』も同様である。正岡は、明治37年に神田に生まれ、作家、寄席研究家であり、落語や浪曲の台本を書き、大衆芸能の啓蒙に努めた。昭和33年没。

本コラムシリーズでは、筆者と知己の人物を〝アイウエオ順〟に「挑戦者の履歴書」として紹介する。最初に紹介するのは、朗読家・青木裕子氏である。かつてNHK-TVのニュース番組に毎朝、登場していたので、名前や顔を思い出す方も多いと思う。2010年に37年務めたNHKのアナウンサーを定年退職、同年、軽井沢朗読館を開設し、その館長となった。2013年には軽井沢町から町立図書館長の就任依頼を受け昨年2020年3月まで在職していたが、その後、名誉館長として、館長時代からの朗読会を継続して毎月土曜日に行っている。

冒頭に掲げた『置土産』は、2020年11月14日（土曜日）午後2時から中軽井沢図書館（2階多目的室）で開催された「名誉館長青木裕子朗読会」の朗読素材である。筆者も同日の朗読会に参加した。同氏にはその後、洸楓座主催の朗読会やシンポジウムに参加して頂いた。そうした縁で、同氏の人となりをここに紹介する次第である。

軽井沢朗読館の外観

▼出身

青木裕子氏は、1950年に福岡県で生まれた。修猷館高校、津田塾大学国際関係学科を卒業し、NHKに入局。名古屋放送局を経て、1975年よりNHK放送センターアナウンス室に所属、「スタジオ102」「NHKニュースワイド」「関東甲信越小さな旅」「おはようジャーナル」などを担当、人気&活躍した。

青木氏は、『再婚トランプ』『軽井沢朗読館だより』などの本も出版し、NHKアナウンサーと同時に、再婚女性、母親介護、義娘母関係などの家庭生活や、軽井沢での朗読活動についても詳しく明快に綴っている。

本コラムでは、おもに、朗読家・青木裕子についてフォーカスを当て紹介する。

「朗読文化」を伝えていくべく、青木氏は軽井沢を拠点の一つとして活動している

▼軽井沢朗読館館長

青木氏は、NHKの定年と同時に、2010年7月に、軽井沢朗読館をオープンした。見事な場面展開である。それには、いくつものドラマがあった。かつて番組の仕事で面識のあった軽井沢在住の自然保護活動家、星野裕一氏から、2007年に「定年後は軽井沢に来ませんか」と電話があったという。定年後は、東京に住み、小さな朗読スタジオをつくり朗読をライフワークにしようと考えていたが、「軽井沢でもスタジオは造れますよ」との誘いに、現地を知人と出かけ、軽井沢朗読館の構想づくりがスタートしたという。定年の2年前から土地購入、木造朗読館の設計・建築工事、スタジオ設備設置等と進み、オープンできたのだった。

朗読館は写真のように木造建築で、設計は東京都立大学（当時、首都大学東京）の教授・建築家の深尾精一氏が、施工は地元の竹花工業の協力で行った。写真にある楽器は、チェンバリストの小澤章代さんが東京から運んできたチェンバロであるという。運営は一般社団法人として行っている。

▼館長・青木裕子朗読会

軽井沢町立図書館には二つあるが、中軽井沢図書館は、しなの鉄道・中軽井沢駅に直結し、駅のリニューアルと同時に2013年4月に新築オープンした。

同時に、青木氏は、中軽井沢図書館長に就任した。その際、軽井沢町とは次のようなやり取りをしたという。

朗読をライフワークとして軽井沢朗読館を創ったので、いわゆる《朗読文化》を通した町へ貢献だったら出来るだろう。…全国の他の町にはない、声の文学表現であり、朗読による軽井沢町の特徴化として…。

このことを契機として「図書館館長 青木裕子朗読会」が実現した。図書館の多目的室で、毎月第2土曜日の午後、2時～3時に入場無料で、月例行事として実施されている。町内外からの参加者が来場し、好評である。

中軽井沢図書館は、駅に隣接で、駐車場もあり、新刊書など蔵書もあり、町民や観光客にも人気である。2013年4月1日にオープンして同年8月には10万人、翌年3月初めには20万人が来場した。その後、2015年10月には入場者50万人、2018年8月には100万人に達したという。予想以上に、中軽井沢図書館が、集いと出会いの交流起点、また観光客の憩いの場ともなっている。青木氏の貢献も大きいだろう。

筆者も、軽井沢の別荘に行くと、中軽井沢図書館やもう一つの離山図書館は落ち着く場所でしばしば訪ねる。また、筆者の洸楓座でも、中軽井沢図書館の多目的室では、これまで4、5回のイベントを行っている。

▼Q&A

青木氏とは、本コラムを執筆するにあたり、コロナ禍でもあり電話インタビューを行った。朗読家・青木裕子の人となりを知ることができた。

Q1 朗読の際、体を揺すり読んでいましたが…。

A1 下読みを3、4回をしますが、朗読していると作者も悩みながら書いているので、その〝もがき〟が、私は文字を追う目を介して脳と一体化し、全身に回るのです。作者の求めたいものと、一緒になるからだと思います。

Q2 どんな作品を選ぶのですか?

A2 「館長 朗読会」では、短編ですが、著名なものでもなく、朗読作品の掘り起こしも兼ねて選び朗読しています。最近は、民間出身の学芸員の奨めもあり、「百年文学」（ポプラ社刊）の中から選択している。今年2月には、ラフカディオ・ハーン著『きみ子』を朗読しました。

Q3 軽井沢町では「子ども読書活動」推進計画を、また近郊の市町とで「朗読駅伝」などをやっていますが、どう評価していますか?

A3 かつて、家族旅行で行ったフィレンツェで感じたことは、観光客にもわかる街の素敵さと地域がつくる素敵さは? でした。軽井沢や住民が地元の素敵さを感じ取り、発信することが必要ではないでしょうか。それには言葉が大事で、《原点》であるように思います。地域の言い回しや独特の言葉が、文化となります。そういう意味では、方言も重要であると思います。読書運動は、子供たちにはとくに大切であると思います。

Q4 軽井沢朗読館では、コロナの中で、イベントは出来ますでしょうか?

A4 昨年2020年は、9月19日に谷川俊太郎父子の「九月の森の風のなかで」を実施しました。12月には、白山麓僻村塾のオンライン配信用の収録がありました。今は冬季で休館中です。利用についてはご相談ください。

Q5 このコラムは、チャレンジを掲げております。青木さんは、軽井沢朗読館、館長朗読会、さらにFM軽井沢での「軽井沢 朗読散歩」など朗読活動で大いにチャレンジされていますが、その精神底流を聞かせてください。

A5 NHKの番組で精神科医の夫との関わりから「全国の精神病院での精神障害者の看護や世話のあり方を改善する医療変革」に一石を投じる提案やチャレンジもしてきました。また、3・11の被災地支援として朗読活動もしてきました。私は37年間、アナウンサーを職業としてやってきましたが、私たちが最も心に響き発することができるのは、《母語》で語るということで、それでないと真実は伝わらないということを学びました。朗読は、母語を極めることになり、誰もができるチャレンジの一つであると思います。それを、私は、ライフワークとして、これからも行います。

著書『軽井沢朗読だより』の表紙写真』

▼まとめ

筆者と同年の青木氏は、別方面の、朗読という一路を歩むこと《履歴と行路》があることは、たいへん幸せなことであると感じた。

その様子は、文中でも述べたが、軽井沢朗読館のホームページで、同氏の朗読を聞き、体験できる。次のサイトで「館長：青木裕子の朗読をご覧頂けます。」を入力。

http://karuizawaroudokukan.jp/%e5%8b%95%e7%94%bb%e3%82%b5%e3%82%a4%e3%83%88%e3%81%8c%e3%81%a7%e3%81%8d%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f%ef%bc%81/

また、FM軽井沢（77・5メガヘルツ）では毎週土曜日（夜9時から30分、その再放送は日曜日に8時から）に、青木裕子氏による朗読番組「軽井沢 朗読散歩」を放送している。次のサイトでインタネットで聞くことができる。「軽井沢 朗読散歩」で検索。

https://fm-karuizawa.co.jp/introduction/%E8%BB%BD%E4%BA%95%E6%B2%A2-%E6%9C%97%E8%AA%AD%E6%95%A3%E6%AD%A9/